

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

四條金吾殿御返事

げんおんりゆうちよう こと

(源遠流長の事)

新版
1614
く
1617

しじようきんごどのごへんじ げんおんりゆうちよう こと

四条金吾殿御返事（源遠流長の事）

こうあん ねん がつ にち さい しじようきんご

弘安2年（'79）9月15日 58歳 四条金吾

ぜにいつかんもんた よりもと 進 そうろう ほけきよう

銭一貫文給びて、頼基がまいらせ候とて、法華経の

ごほうぜん もう あ そうろう さだ とお きようしゆしやくそん

御宝前に申し上げて候。定めて、遠くは教主釈尊なら

たほう じつぼう しょうぶつ ちか にちがつ くてん たも

びに多宝・十方の諸仏、近くは日月の宮殿にわたらせ給う

ごしようらんそうら

も、御照覧候いぬらん。

ひと 世 勝 けんじん しょうにん 思

さては、人のよにすぐれんとするをば、賢人・聖人とおぼ

ひとびと みな 嫉 妬 そうろう 況 つね ひと

しき人々も皆、そねみ、ねたむことに候。いおうや常の人

をや。

かんこう

おうしようくん

さんぜん

后

嫉

たいしやく

漢皇の王昭君をば三千のきさきこれをそねみ、帝釈の

くじゅうくおくなゆた

きようしか

妬

さきのちゆうしよおう

九十九億那由他のきさきは橋戸迦をねたむ。前中書王を

小野みや おとど

きたの てんじん

ときひら

ば、おのの宮の大臣これをねたむ。北野の天神をば、時平の

大臣

讒 奏

なが たてまつ

おとどこれをざんそうして流し奉る。

思

にゆうどうどの

みうち

ひろ

うち

これらをもつておぼしめせ。入道殿の御内は広かりし内

狭

たま

公

達

おお

たも

なれども、せばくならせ給い、きゆうだちは多くわたらせ給

うち

年

来

ひとびと

多

たま

いけ

みず

少

う。内のとしごろの人々あまたわたらせ給えば、池の水すく

うお 騒

あきかぜた

とり

梢

争

なくなれば魚さわがしく、秋風立てば鳥こずえをあらそう

そうろう

そうら

幾

みうち

ひとびと

嫉

ように候 ことに候えば、いくそばくぞ御内の人々そねみ

そうろう

たびたび

おお

返

時

々

みこころ

違

候らんに、度々の仰せをかえし、よりよりの御心にたがわ

たま

讒言

そうろう

たびたび

せ給えば、いくそばくのざんげんこそ候らんに、度々の

ごしよりよう

返

いま

しよりようたま

たま

うんぬん

御所領をかえして、今また所領給わらせ給うと云々。これ

ほど ふしぎ

そうら

いんとく

ようほう

程の不思議は候わず。これひとえに、「陰徳あれば陽報あ

わ

しゆ

ほけきよう

しん

り」とは、これなり。我が主に法華経を信じさせまいらせ

思

みこころ

深

ゆえ

んとおぼしめす御心のふかき故か。

あじやせおう

ほとけ

おんあだ

ぎばだいじん

おん

勸

阿闍世王は仏の御怨なりしが、耆婆大臣の御すすめによ

ほけきよう

ごしん

よ

たも

たも

みようしようごんのう

つて法華経を御信じありて代を持ち給う。妙莊嚴王は

にし おん

じゃけん

翻

たも

二子の御すすめによつて、邪見をひるがえし給う。これま

然

きへん おん

いま みこころ

和

たしかるべし。貴辺の御すすめによつて、今は御心もやわ

たま

そうろう

きへん

ほけきよう

ご

らがせ給いてや候らん。これひとえに貴辺の法華経の御

しんじん

深

ゆえ

信心のふかき故なり。

ね 深

えだ 栄

みなもととお

なが

なが

もう

「根ふかければ枝さかえ、源遠ければ流れ長し」と申し

いっさい

きよう

ね 浅

なが

近

ほけきよう

ね

て、一切の経は根あさく流れちかく、法華経は根ふかく

みなもと

まつだいあくせ

尽

栄

てんだいだいし

源とおし、末代悪世までもつきずさかうべしと天台大師

遊

たま

ほうもん

付

ひと 数

多 そうら

あそばし給えり。この法門につきし人あまた候いしかども、

公

私

だいなんたびたびかさ

そうら

いちねん

おおやけ・わたくしの大難度々重なり候いしかば、一年

にねん

付

そうら

のちのち

みな

落

二年こそつき候いしが、後々には、皆、あるいはおち、あ

るいはかえり矢を返いる。やあるいは身は射おちねども心みおち、こころ

あるいは心はおちねども身はみおちぬ。

しやかぶつ

じようぼんおう

ちやくし

いちえんぶだい

ちぎよう

はちまん

釈迦はは、浄飯王の嫡子、一閻浮提を知行すること八万

しせんにひやくいちじゆう

だいおう

いちえんぶだい

しよおう

こうべ

傾

四千二百一十の大王なり。一閻浮提の諸王、頭をかたぶけ

うえ

みうち

め

使

ひとじゆうまんおくにん

じゆうく

ん上、御内に召しつかいし人十萬億人なりしかども、十九

おんとし

じようぼんおう

みや

い

たま

だんどくせん

い

の御年、浄飯王の宮を出でさせ給いて、檀特山に入つて

じゆうにねん

あいだ

おん

供

ひとごにん

くりん

十二年、その間、御ともの人五人なり。いわゆる、拘隣と

あび

ばつだい

じゆうりきかしよう

くりたいし

ごにん

頰鞞と跋提と十力迦葉と拘利太子となり。この五人も、

ろくねん

もう

ににん

さ

のこ

さんにん

のち

ろくねん

捨

六年と申せしに二人は去りぬ。残りの三人も後の六年にす

たてまつ

さ

いちにんのこ

たま

ほとけ

成

て奉つて去りぬ。ただ一人残り給いてこそ仏にはならせ

たま

ほけきよう

過

ひとしん

給いしか。法華経は、またこれにもすぎて人信じがたかる

なんしんなんげ

べし。難信難解これなり。

ほとけ ざいせ

まつぼう

だいなん

また仏の在世よりも末法は大難かさなるべし。これを

堪

ぎようじや

わ くどく

勝

いつこう

こらえん行者は、我が功德にはすぐれたること一劫とこそ

と

そうら

説かれて候え。

ほとけめつど

のちにせんにひやくさんじゅうよねん

そうろう

がっし

仏滅度して後二千二百二十余年になり候に、月氏

いつせんよねん

あいだ

ぶつぼう

ぐつう

ひと

でんき

載

隠

一千余年が間、仏法を弘通せる人、伝記にのせてかくれな

かんどいつせんねん

にほんしちひやくねん

もくろく

載

そうら

し。漢土一千年、日本七百年、また目録にのせて候いし

かども、ほとけ 仏のごとく大難に値える人々少なし。われ 我も聖人、

われ 我も賢人とは申せども、きようめつどご 「況滅度後」の記文に値える人一人

そちら も候わず。竜樹菩薩・天台・伝教こそ仏法の大難に値え

ひとびと る人々にては候えども、およ これらも仏説には及ぶことなし。

これ即ち、代のあがり、ほけきよう 法華経の時に生まれ値わせ給わざ

る故なり。ゆえ

いま 今は、とき 時すでに後の五百歳、はじ 末法の始めなり。日には五月

じゆうごにち 十五日、つき 月には八月十五夜に似たり。天台・伝教は先に生

たま まれ給えり。いま 今より後は、のち またのちぐえなり。大陣すでに破

後 悔

たいじん 大陣すでに破

やぶ やぶ

よとう もの

数

いま

ほとけ

しる

置

たま

れぬ、余党は物のかずならず。今こそ仏の記しおき給いし

のち ごひやくさい

まっぼう

はじ

きやうめつどご

とき

あ

そうら

後の五百歳、末法の初め、「況滅度後」の時に当たつて候え

ぶつご 虚

いちえんぶだい

うち

さだ

しやうにんしゆつげん

ば、仏語むなしからずば、一閻浮提の内に定めて聖人出現

そうろう

しやうにん

い

徴

いちえんぶだいいい

して候らん。聖人の出ずるしるしには一閻浮提第一の

かつせん 起

と

そうろう

かつせん

お

合戦おこるべしと説かれて候に、すでに合戦も起こつて

そうろう

しやうにん

いちえんぶだい

うち

い

たま

そうろう

候に、すでに聖人や一閻浮提の内に出でさせ給いて候

らん。

麒麟 い

こうし

せいじん

知

りしや 鳴

せいじん い

きりん出でしかば、孔子を聖人とする。里社なつて聖人出

たも

うたが

ほとけ

せんだん

き 生

しやうにん

で給うこと疑いなし。仏には梅檀の木おいて聖人とする。

ろうし にご もん ふ せいじん まつだい ほけきよう しようにん
老子は二五の文を踏んで聖人とする。末代の法華経の聖人

をば何をもつてかしかるべき。経に云わく、能くこの経を説
な_に 知_ち きよう い よ きよう と

き、能くこの経を持つの人、則ち如来の使いなり。八卷・
よ きよう たも ひと すなわ によらい つか はっかん

一卷・一品・一偈の人、乃至題目を唱うる人、如来の使い
いっかん いっほん いちげ ひと ないしだいもく とな ひと によらい つか

なり。始中終すてずして大難をとおす人、如来の使いなり。
しちゆうじゆう捨 だいなん 通 ひと によらい つか

日蓮が心は全く如来の使いにはあらず。凡夫なる故な
にちれん こころ まった によらい つか ほんぶ ゆえ

り。ただし、三類の大怨敵にあだまれて二度の流難に値え
さんるい だいおんてき 怨 にど るなん あ

ば、如来の御使いに似たり。心は三毒ふかく、一身凡夫に
によらい おんつか に ころ さんどく いっしんほんぶ

て候えども、口に南無妙法蓮華経と申せば、如来の使いに
そうら くち なんみようほうれんげきよう もう によらい つか

似たり。過去を尋ねれば、不輕菩薩に似たり。現在をとぶら

とうじようがしやく くわ

違

みらい とうけい

うに、「刀杖瓦石を加う」にたがうことなし。未来は当詣

どうじよううたが

養

たも ひとびと

道場疑いなからんか。これをやしなわせ給う人々は、あ

どうごじようご

ひと

ことおほ

もう

止

そうろう

に同居浄土の人にあらずや。事多しと申せども、とどめ候。

こころ

はか

たも

心をもつて計らせ給うべし。

稚児 所 勞

よろこ

そうろう

だいしんの

ちごのそろう、よくなりたり。悦び候ぞ。また、大進

あじやり しきよ

まつだい

耆 婆

過

阿闍梨の死去のこと、「末代のぎば、いかでか、これにすぐ

みなひとした

振

そうろう

そうら

べき」と、皆人舌をふり候なり。さにて候いけるやらん。

さんみぼう

しろう

ふけい

三位房がこと、そう四郎がこと、このことはあたかも符契、

ふけい もう 合 ほうろう ほうろう にちれん ししやう 任
符契と申しあいて候。日蓮が死生をばまかせまいらせて

ほうろう まった ほか 医 もち ほうろう
候。全く他のくすしをば用いまじく候なり。

くがつじゆうごにち
九月十五日

にちれん かおう
日蓮 花押

しじやうきんごどの
四條金吾殿